インフィニット・ストラトス　束ルート…のような何か

駄犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス　束ルート…のような何か

【Ｎコード】
Ｎ４７７０Ｓ

【作者名】
駄犬

【あらすじ】
束さんがヒロインだっていいじゃない。

４／２１
ちょっと自信が無いのでタイトル変更

第一話（前書き）

極力原作を尊重するつもりですが、キャラは崩壊気味です。
オリジナル要素やクロスネタはありません。
終始ほのぼの予定。

４／１７
一度は投稿したものの、内容に納得いかない部分が多いのでしばらく手直しが続きます。
さーせん。

第一話

ある日の夜。
いつものように学食で夕飯を食べて自室に戻ると、予想外の人物に遭遇した。

「やっほー、いっくんの未来の義姉、束さんだよ！」
「すみません間違えました」

――――バタン。
俺は一言謝ってから扉を閉めた。
予想以上に疲れているらしい。危うく違う人の部屋にお邪魔するところだった。
最近は専用機持ちの連中（楯無さん含）に散々しごかれているお陰で、夜は毎度クタクタだ。
一刻も早く自室でベッドに倒れ込もう。うん、そうしよう。

「むむむ！　この私をスルーするなんて……腕を上げたね、いっくん！」

さっさと廊下を進もうとすると、背後からウサギお化けが声を掛けて来た。

コマンド
▼まっさーじ
▼どげざ
▼にげる
ニア　▼げんじつ

「束さん、何してるんです？」

一度聞いたら忘れないようなハイテンションな声。
異様に似合っているウサミミに、エプロンドレス。
冗談をやめて後ろを振り向くと、そこに居たのはＩＳ開発の第一人者、篠ノ之束その人だった。

「いやあ、ちょっといっくんにお願いがあってね」
「疲れてるんで手短にお願いします…」

なんでここに居るんですか、とか聞きたいことは色々あるが、今は非常に疲れている。束さんには悪いけど、手早く済ませたい。

「分かった。じゃあ、泊めて？」

……。

「へっ？」
「だからぁ、束さんはいっくんのお部屋にお泊まりしたいのだよ」

何やらとんでもない事を言い出した！

「い、いや、駄目ですよ」
「えーっ、なんでなんでー！？」
「なんでって。そもそも束さん、ここの関係者じゃないでしょ？」
「関係者だよ。ＩＳ作ったのはこの私だもん」
「いや、そういうことじゃなく……と、とにかく、駄目なもんは駄目です！」

箒やシャルはまだ同じ生徒だったから良いが、束さんは違う。勝

手に泊めたのがバレたら確実に千冬姉に大目玉をくらうだろう。
それに束さんは立場が立場だ。学園の守りは相当堅い筈だが、万一ということもある。ここで一晩過ごすのなら秘密にするより千冬姉に言って何か対策を講じて貰った方がいい。悔しいけど、まだまだ未熟な俺じゃ役に立てるかどうか分からない。
そんなわけで、あーだこーだ言い合うこと数分。

「むう。いっくんはちーちゃんに似て頑固だよねー。そんな子は…」

そう言って、何かが荒ぶりそうな珍妙な構えを取る束さん。
何だ？
何をする気だ？

「ハグハグの刑だー！」
「うお！？」

そう叫ぶと、目にも止まらぬ早さで抱きついて来る束さん。
はえぇ、なんつうスピード…。

「おー、いっくんも昔に比べて大きくなったねぇ」
「そりゃ何年も経ってるし……と言うか、離れてください！」
「やだ、いっくんが泊めてくれるまで離れない！」
「ぬああ！」

子供みたいなことを言い出す束さん。
と言うか、あんまりくっつかれると色々困る。
押し付けられる柔らかい物体とか、女性特有の甘い匂いとか。いかん、落ち着けマイハート。

「と、とにかく、泊まるなら、まず千冬姉に言ってください…！」

引き剥がそうとぐいぐい押しながら言う俺。
意外とパワフルだよな、この人。
「だめだめ。ちーちゃんに見つかったら追い出されちゃうよ」
これまたぐいぐいと押しながら言う束さん。
さすが天才だ、男と押し合っても何ともないぜ！
……ではなくて。
「と、言うかですね…！　なんで、ここに居るんですか…！」
ぐいぐい。
「んー、箒ちゃんに会いに来たんだけどね。ちょっとタイミング逃がしちゃったから、泊り掛けで姉妹のスキンシップを図ろうかなーって」
ぐいぐい。
「…あー、なるほど…」
箒と束さんは色々あって仲がこじれている（と言うより、箒の方が束さんを避けている、という感じだが）。
紅椿の一件で多少は解消されたと思ったんだが、まだまだらしい。せっかく姉妹なんだからやっぱり仲が良いに越したことはないと思う。箒だって心の底から嫌っているわけじゃないだろうし、今の状況は二人とも辛いだろう。
ぐいぐい。

「あれれ？　もしかしていっくん、心配してくれてる？」
「そりゃ、してますよ。大事な幼馴染じゃないですか」
「そっかそっかー。箒ちゃんも幸せ者だね」

そう言って束さんは本当に嬉しそうに笑う。
けれど、俺にはその笑みが少しだけ寂しそうにも見えた。
束さんだって人間だ。いくら世間に名を轟かすような天才でも、家族に辛く当たられたら寂しいんじゃないだろうか。
いや、寂しいに決まってる。

「…勿論、束さんだって大事ですけど」
「え」

気がついたら、そんなことを言っていた。
束さんは目を瞬かせて俺を見る。

「や、やだなぁ、もう。いっくんったら。へへ、冗談でも嬉しいかな…」

むう。
一応本気で言ったんだが。
もしかしたら、単なる同情も含まれているのかもしれない。
でも、それでも小さい頃から良くして貰っているのは間違いない。
そんな人を大切だと思うのはいけないことなのだろうか。

「冗談じゃありません。マジです」
「う…。も、もー、あんまりお姉さんをからかわないで欲しいんだよ…」

我ながら何故こんなに意地になっているのか分からないが、ちょ

っとムキになって言うと、束さんはあからさまに赤面した。
千冬姉ほどじゃないが、俺もこの人とは結構長い付き合いだ。だけど、こんな顔をする束さんは初めて見る。
……まずいぞ。なんかドキドキしてきた。
とりあえずこの体勢をどうにかしないと…って、ずっとこのまま話してたんだな。我ながら凄くシュールな絵だったに違いない…。
ふと、そこまで考えて。
唐突に束さんが腕に力を込めるのをやめた。

「うおっ！？」
「きゃっ！」

気付いた時にはもう遅い。
俺が一方的に押す形になった二人は、そのまま廊下の壁にぶつかった。と言うか今、束さんらしからぬ（↑失礼）可愛い悲鳴が響いたような。
……って今はそんなことどうでもいい。

「た、束さん、だいじょう……」

ぶ、と言おうとした瞬間、超至近距離の束さんと目が合った。
ぴしりとお互いに硬直する。
これは…マズい。
心臓がどくどく音を立て始めて、頭の中が真っ白になる。
まるで新兵が激戦区のド真ん中で取り残されたかのような……
そうだ、こういう時はあれだ！　状況を整理するんだ！
ＨＱ！　ＨＱ！　状況を報告！
俺、束さんの腕を掴んで壁に押し付けてる（しかも両腕）。
標的との距離、ほぼゼロ。どうしてこうなった。

「い、いっくん…？」

束さん、赤面して硬直中。

ドラマか何かでたまにある、チンピラが女の子を襲うシーンに酷似。

驚きで俺も上手く頭が回らないが、とりあえず故意ではない。

以上、増援を要請する！

「僕で良ければ援護するよ。一夏」

おお、シャルが来てくれた。

これで増員はバッチリだ。なんせ前はコンビを組んでいた程で――

「……？」

……ん？

シャル？

「えへ♪」

なんでシャルが、と首を動かして（何故かカクカクして上手く動かない）左後方を見ると、なんかラファール・リヴァイヴＭｋ２を部分展開して物理シールドを構えたシャルロットさんがいらっしゃった。

「来ちゃった♪」

「き、来ちゃったのか…」

「うん、何だか呼ばれた気がしてね」

ニッコリ笑顔で言うシャル。
その分、構えた大盾が非常にミスマッチで、その…。

「ところで、一夏」
「な、何だ？」
「僕もね、女の子の方からアプローチされるのはもう仕方ないと思ってるんだ。一夏っておかしいくらいモテるし。でもね…」
「は…？」
「あれだけ皆に好かれてるのに、他の女の子にまで手を出そうとする人は――――」

ＩＳが床を踏みしめる音が、がちょん、と響いた。

「馬に蹴られて、死ぬといいよ？」

ふむ。この場合、馬ならぬ盾なわけだが。
…あ、いや、あの、今のナシ。冗談です。
だから待っ――――

ギャアアアアアアアア！！

余談だが、シャルにぶっ飛ばされた次の日、騒動の中心人物だった束さんは完全に姿を消していた。
意識が途切れる間際に見た、頬を染めてぽーっとしている束さん、ちょっと可愛かったなぁ。
などと考えていたら箒に頭をはたかれ、他のメンバーからも絶対零度の視線を頂いた。
……とほほ。

第一話（後書き）

初めまして。
以前から二次創作はちょこちょこやっていたんですが、こちらに投稿させて頂くのは初めてです。
基本的に亀更新だったり、勝手に手直ししたりすることもありますが、ぬるーく見守って頂けると幸い。
それでは。

第二話（前書き）

改訂改訂また改訂。申し訳ないでござる。

第二話

「はい、それでは授業を終わりますね」

山田先生ののんびりとした声と共にＩＳ学園は昼休みを迎える。
何だかんだであれから一週間が経過していた。
当時のみんなの不機嫌さと言ったらあの黛先輩も裸足で逃げ出す程だった（と言うか実際逃げた）が、最近は少しずつみんなも落ち着いて来ていてようやく平常運行に戻りつつある。
女子ってやつは男子に対して「不潔！」みたいな所があるから、今回のもそんな類のものだったんだろう。我ながら名推理…と結論付けていたら千冬姉に哀れみを含んだ目で見られた。何故だ。
「お前、いつか刺されるんじゃないか」とは我が姉の言葉である。
全く以て意味が分からんが…まぁ、それはそれ。今はみんなもだいぶ落ち着きを取り戻してくれたみたいだし、それで良しとするか。
あまり深く考え過ぎて勉学が疎かになるのはまずい。

「行くぞ、一夏」
「おわ！？」

などと回想に浸っていたら、唐突にラウラに首根っこを掴まれる。
なんて早さだ。まだ授業が終わって５秒と経ってないぞ。

「な、何するんだよ、ラウラ」
「いいから立て。早くここから離脱しなければ…」

ちらりと赤い瞳が教室の扉を一瞥する。
時間が早過ぎるせいだろう。生徒はまだ誰も外に出ておらず、廊下は静寂に包まれていた。

「ラウラ、もう急いでもあんまり意味無いと思うよ…」
何かを諦めたかのように言うのはシャルロットだ。
「何を言う。無駄を徹底的に省いて行動すればまだ分からん」
「でも、ほら…」
シャルの溜め息と共に、まだ誰もいないはずの廊下から『ずどどどどど…』と騒音が聞こえ始める。
あー、ごほん。廊下は走っちゃいけませんよー。
「くっ…また間に合わなかったか！」
心底悔しそうなラウラだった。
そうしている間にも騒音は教室に急速接近して来る。
やがてそれは扉の前でキキィーっとまるで車の急ブレーキのような音を立てて停止。
そして――――。
「やぁやぁ、箒ちゃん、いっくん！　今日も来たよ！」
案の定、束さんが姿を現した。
「ね、姉さん…」
額に手を当てる箒。
最近は最早お馴染みの光景である。
一週間前のあの一件以来、彼女は時々こうして学園に現れるようになった。

…箒と、何故か俺の分の弁当を持参して。

「はい、これ。今日の分のお弁当ね」

「ど、どうも…」

ひょい、ひょい、と目にも止まらぬ早さで俺と箒の机に和風模様の包みを置いて行く。

箒は気まずそうにしながらも、素直に受け取った。

「…今更ですけど、いいんですか？　俺まで貰っちゃって」

「いーのいーの。この天才束さんに掛かればお弁当の一つや二つ、朝飯前さっ」

ここ数日なし崩し的に受け取り続けて来たが、流石に悪いのではと思案する俺にピースする束さん。

この人のことだから本当に朝飯前なんだろう。

二つや三つくらい同時に調理してそうだ。

それに味だって中々のものだし、これは俺もうかうかしていられないな。

「それじゃ、早速移動しよっか」

そう言って笑みを浮かべる束さんはとても楽しそうで、いつにも増して子供っぽい。

そういえばこの人も千冬姉と同い年なんだっけ。

二人を比べてみるとあまりの性格の違いに改めて驚く。

見事に対照的だ。人間、よくここまで個性が分かれるよな。

試しに束さんみたいなノリの千冬姉を想像してみたが、あんまりにもあんまりなので俺は考えるのをやめた。

「ほう、どこに行く気だ？」
……噂をすれば何とやら。
「どこって、勿論屋上――――」
「屋上は数日前からお前限定で利用禁止にした筈だが、な！」

ぎりぎりぎりぎり！
音も無く背後に忍び寄っていた千冬姉の顔面アイアンクローが東さんに炸裂する。
そりゃあんだけ騒音響かせてちゃ見つかるよなぁ。

「あああああ、痛い痛い痛い！　痛いよ、ちーちゃん！」
「やかましい。部外者は立ち入り禁止だと何度言えば分かるんだ、馬鹿が」
「うぅ、だって暇なんだもん。ちーちゃんは忙しそうだし、箒ちゃんといっくんなら平気かなーって」
「そうか。だが安心しろ、お前の相手は私がしてやる。懲罰部屋で、たっぷりとな」
「おお、それはもしかしなくても調教フラグかな！？」
「違う」

ドゴッ！

「それと織斑。お前も放課後来い。話がある」
「え、俺もですか！？」
「勘違いするな、単に聞きたいことがあるだけだ」
「ま、まさかちーちゃん、私だけじゃ飽き足らず、遂にいっくんまでその毒牙に――――」
「くたばれ」

グシャッ！

「いたぁーい！　今ちょっと効果音が洒落になってなかったよ！」
「許せ、殺す気はあった」
「あったんだ！　ひどいよ！　そこのおっぱいにはあんなに優しいのに！」
「お、おっぱい……」
「知らんな。ほら、行くぞ。変態」
「せめて名前で呼んでー！」
「黙れ、お前など変態で十分だ」

ギャーギャー。
騒ぎながら千冬姉に引きずられていく束さん。

「二人とも、また来るからね～！」

ずるずる引きずられながら手を振っている。
この一週間、何度繰り返された光景だろう。
束さん出現→千冬姉出動→束さん退場の三拍子。最初こそクラスの皆は唖然としていたが、最近はもう慣れたのかあまり動揺しなくなっていた。
事実、今の騒ぎを合図にするようにクラスは休憩時間特有の喧騒に包まれ始めていたりして。
つくづく思う。慣れってすげぇ。

「さて…」

正直、せっかく作って貰ったんだから束さんと一緒に食べたいという思いもあるのだが、規則は規則。仕方が無い。

諦めて、いつも一緒に居るメンバーを見回してみると。

「「「「……」」」」

うわぁ。

箒を除く三人が揃ってこっちをじっとりした目で見ていらっしゃる。

なんだ、そんなに束さんの弁当が羨ましいのか？

まぁ確かにレアだとは思うけど、そんな目で見られても困るぞ。

全く、あの人が弁当を持って来た日は毎回こんな感じだ。わけがわからないよ。

「ほ、箒ー？」

救いを求めて、さっきから弁当をじぃーと見つめて動かない箒に声を掛けてみた。

「……あ、ああ、何だ？」

「弁当、どこで食べる？」

「「「当然、食堂だ！（だよ！）（ですわ！）」」」

ですよねー…。

左右をラウラとシャルロットに拘束され、俺は犯罪者よろしく学食に連行されるのであった。

第二話（後書き）

これまたグダグダやで！
しかも原作やアニメと比べれば比べるほど束さんのキャラが崩れている気がする。
俺に文才はにぃのか（、・ω・、）。

第三話

――――食事っていうのは、なんていうか救われなくちゃいけないんだ。

……前にこのフレーズが浮かんだのはいつだったろう。

「「「「「……」」」」」

しーん。

ひたすらしーんとしている。

好奇の視線を注いでいる一部の連中を除き、俺達は何故か沈黙を保ったまま食堂の一角を陣取っていた。

「……ねぇ」

途中で合流した鈴が沈黙を破る。

「な、何だよ」

「食べないの、それ」

顎でしゃくる。

視線の先には例の弁当があった。

「いや、食うけどさ…」

食べるのは食べるさ。

ただ、みんなの妙に恨みがましい視線が気になって手をつけ辛いんだよ。

「……いただきます」

苦悶していると、箒が一足先に食事を始めた。
くそう、仲間だと思ってたのに。
こうしちゃいられんと俺も包みをさっさと開けていく。
かぱり。

「またか！」
「え？　ど、どうした？」
「…あ、いや」

変なラウラだ。

「ハート、ですわね」
「おう、ハートだな」

隣に座っているセシリアがぼそっと呟く。
何てことはない。弁当の白米の上に、ハート型にふりかけがまぶしてあるだけだ。ちなみに箒の弁当も同様。
確かにちょっと恥ずかしいが、束さんの性格を鑑みれば特に騒ぐようなことでもない。
だと言うに、このお嬢さんは何故そんなに頬を膨らませているのだろう。

「えー……いただきます」

ええい、こうしていてもラチが開かない。
意を決して箸でご飯をつま———

「「「「うぅぅぅ…！」」」」

めねぇよ！？

「だあ、もう、なんなんだよ！」
「べ、別に何でもないわよ！」

何でもないのに唸る奴が居るか！

「…ふんっ」

気付けば箒ももそもそ食べながら拗ねてるし。
……あ。
でも、ちゃんと食べるのは食べるんだよな。
何だかんだで毎回完食するし、不機嫌そうな顔をしながら意外と機嫌は良いのかもしれない。

「箒」
「何だ？」
「実は嬉しいだろ」
「っ、ごほっ…」

図星だったようだ。
…背中をさすってやろう。

「い、一夏ぁ！」

涙目の箒から鋭い一撃が飛ぶ。
スクリューアッパー！
そういうのもあるのか！

「馬鹿ね」
「馬鹿ですわ」
「馬鹿だな」
「馬鹿だね」

……ひでぇや。

◆

（全く、一夏の奴…！）

放課後。
更衣室でＩＳスーツに着替えながら箒の内心は複雑だった。
ここ数日の姉の奇行に、彼女はすっかり情緒不安定に陥っている。

（ま、まぁ、確かに姉さんの弁当は美味かったし……嬉しくもあったが）

さっきはデリカシーの欠片も無い言い様につい混乱して手を上げてしまい否定する形になってしまったが、姉の手作り弁当はそれはもう店で売られていても文句のないレベルの味だった。
やはり彼女は天才で、不器用な自分とは違う。
一夏だって美味しそうに食べていたし……もし、あの人が一夏のことを本気で好きになっていたとしたら、自分など手も足も出ないのではないか。
そんな事実をさまざまと見せつけられた気がして、箒のコンプレ

ックスはさらに膨らむばかりだ。

（ぐぬぬ…！）

結果的にとは言え、自分が一夏から引き離される理由を作った姉。
その姉に、今度は一夏まで奪われるかもしれない。
わざわざ一夏の分の弁当まで用意しているのだ、多かれ少なかれ既に好意は抱き始めているだろう。
…最近、ようやく仲直りできそうな気がしていたのに。

「……はぁ」

溜め息に色がついたなら、今のは間違いなく灰色だったはずだ。

（一夏に会いたい…）

こうやってネガティブなことを考えたあとで頭に浮かぶのは、いつだって初恋の相手の顔だった。

（……ん、待てよ？）

彼の顔を思い浮かべてから、ふと気付く。
仮に、ではあるが。
そんなことは絶対認められないし、そう簡単に譲る気も無いのだが。
もしも仮に、万が一、束と一夏がくっついたとして。

（一夏が義理の兄に……？）

想像してみる。

もしも一夏が自分の兄だったら。

『おはよう、箒』
『お、おはようございます』
『相変わらず固いなぁ、箒は』
『こ、これが素なので…』
『うーん……そりゃ！』
『きゃっ、な、何を―――』
『何って、可愛い妹を抱きしめてるんだが』
『か、かわっ…！？』
『可愛いよ、箒』
『に、兄さん…』

ぽわーん。

……

（……はっ！？）

帰還。

（ど、どうかしている…！）

かぁーっと顔が熱くなる。
一瞬でも『イイかも…』とか思った自分が情けないやら何やらで泣きたくなった。

「……はぁ」

またしても溜め息が零れる。
箒の情緒不安定は、まだしばらくの間、続きそうだった。

第三話（後書き）

束さんが今回完全に空気。
これじゃ束ルート（笑）とか言われて馬鹿にされるのも時間の問題か。
やり過ぎには気を付けたいけど、作者はファース党だから仕方ないね。

そういえば原作のほう、七巻でまた増えましたね。何がとは言いませんが、一夏、ナイスでーす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4770s/

インフィニット・ストラトス　束ルート…のような何か

2011年4月27日16時57分発行